学術論文

ボリビア国研修生に対する実践型研修の試み

－筑波大学附属大塚特別支援学校における模擬授業を事例として－

野村　勝彦[*,*****]　安藤　隆男[**]　四日市　章[**]　藤原　義博[**]　長﨑　勤[**]　左藤　敦子[**]
間々田和彦[*,***]　日髙　雄之[*,****]　吉沢　祥子[*,******]　沼澤　聡子[*,*******]

ボリビア国の特別支援教育研修生を筑波大学特別支援教育研究センターで約１か月受け入れ、筑波大学附属大塚特別支援学校で２週間の研修を行った。ここでは、講義・演習・模擬授業実習を行う実践型研修を実施した。参加した研修生は、教員養成大学教員、特別支援学校の校長、特別支援教育センター教員であった。

筑波大学附属大塚特別支援学校では、５名の知的障害研修グループが協働して模擬授業を実施した。研修生は各々所属する地域、職場や地位の違いを克服して協働した授業づくりを成功させた。また、日本型の授業づくりがボリビア国に一部適用できる可能性を見いだし、子どもの実態把握の方法、研究授業の方法等を具体的に研修することができた。

キー・ワード：ボリビア多民族国　国際教育協力　模擬授業　特別支援教育　実践型研修

はじめに

本センターでは、本学人間系障害科学域（旧障害科学系）及び本学教育開発国際協力研究センター（CRICED）と共に開発途上国への国際教育協力及び支援として、これまで東南アジア諸国、南米諸国からの特別支援教育にかかわる研修生を受け入れてきている。特に独立行政法人国際協力機構（JICA）と連携して行ってきたボリビア多民族国（以下ボリビア国とする）を対象とした「ボリビア特別支援教育教員養成プロジェクト（以下プロジェクトとする）」がボリビア本国で平成22年度から実施され、本センターでは平成23年度から本邦研修及びフォローアップの現地研修等に協力している。

本プロジェクトでは、「ボリビア国の特別支援教育を担う中核人材を育成する」ことが目標として掲げられている。この目標を達成すべく、ボリビア本国において、新規教員養成大学（３校）の特別支援教育専攻教員と、特別支援学校パイロット校（７校）の教員を対象として、全国研修セミナーと県研修セミナーが実施された。

また本プロジェクトでは、日本の特別支援教育に携わる現職教員や専門家をボリビア国へ派遣し、ボリビア国で行われている授業や指導に対して助言を行うだけでなく、教育実践を基盤に置いたプログラムを活用した本邦研修をプロジェクトの中核に位置づけている。日本の教育実践の場に身を置き学ぶ経験を通して、ボリビア国で展開されている研修の成果をより向上させ、特別支援教育の強化を促進することを目指した構成が含まれている。

本邦研修に求められる成果については、「ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト」におけるボリビア国内の研修進捗との関係から、2011年度には「子どもの実態把握と個別の指導計画の作成」、2012年度には「授業案および教材教具の作成」が目標として掲げられた（左藤、2013）。

Ⅰ．附属大塚特別支援学校での本邦研修プログラム

教育実践に基盤を置いた本邦研修プログラムについては、左藤（2013）に詳しく記述されているので、参照されたい。以下筑波大学附属大塚特別支援学校での研修プログラムについて報告する。

１．附属大塚特別支援学校ボリビア本邦研修プログラム

⑴　目　　的

本研究は、本邦研修プログラムの中で、筑波大学附属大塚特別支援学校で実施された「模擬研究授業」及び関連した講義・演習の内容について報告し、附属特別支援学校での実践型研修の試みにおいてどのような成果や課題が出されたのかを検証することを目的とする。

[*]筑波大学特別支援教育研究センター　[**]筑波大学人間系　[***]筑波大学附属視覚特別支援学校　[****]筑波大学附属聴覚特別支援学校
[*****]大塚特別支援学校　[******]筑波大学附属桐が丘特別支援学校　[*******]筑波大学附属久里浜特別支援学校

⑵　実施日時

2012年6月11日㈪～22日㈮　8：30～17：30

⑶　実施場所

筑波大学附属大塚特別支援学校

（文京区春日１－５－５）

⑷　研　修　生

①　エンリケフィノット教員養成校教員

１名（専門：実態把握・発達障害）

②　プレファＢセンター

１名（専門：幼稚部早期教育）

③　プレファコチャバンバセンター

１名（専門：知的障害）

④　ムルラタセンター　１名（専門：小５）

⑤　ムルラタセンター

１名（専門：コーディネーター、小２）

Table1　２週間のプログラム内容

月日曜		内　　容
6/11 月	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 合同朝会、中学部、高等部、幼稚部授業見学
	昼	給食
	ＰＭ	講義：学校概要（副校長） 学校研究（研究部長） 保健・給食（養護教諭・栄養教諭） 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/12 火	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 高等部、小学部授業見学
	昼	給食
	ＰＭ	講義：教育課程（副校長） 児童の実態把握（小学部主事） 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/13 水	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 小学部授業見学 模範授業（小学部音楽）見学
	昼	給食
	ＰＭ	講義：個別の指導計画（センター教諭） 性の指導（センター教諭） 模範授業反省会（副校長、授業担当教員） 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/14 木	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 小学部授業見学、避難訓練体験
	昼	給食
	ＰＭ	小学部授業見学 講義：授業づくり（小学部主事） 質疑応答・連絡
6/15 金	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 社団法人障害児・者の自立を図る桐親会：工房わかぎり見学
	昼	給食
	ＰＭ	社会福祉法人山鳥の会：ワークショップやまどり見学 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡

月日曜		内　　容
6/18 月	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 合同朝会での交流会、小学部授業参観
	昼	給食
	ＰＭ	講義：進路指導（進路指導主事） 教材開発（高等部主事） 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/19 火	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 小学部授業参観
	昼	給食
	ＰＭ	授業準備、授業リハーサル 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/20 水	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 授業準備 研究授業：模擬授業（小学部音楽）
	昼	給食
	ＰＭ	反省会（副校長、小学部教員） 質疑応答 本日のまとめ、明日の日程連絡
6/21 木	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 文京区立柳町小学校（通常・特別支援学級、特別支援教室）見学
	昼	給食
	ＰＭ	講義　支援部（地域支援・UD 教材等） 質疑応答・本日のまとめ、明日の日程連絡
6/22 金	ＡＭ	日程確認・ポイント説明 研究授業参観（小学部・中学部）
	昼	昼食
	ＰＭ	協議会参加 質疑応答 全体まとめ（感想及びまとめ）、明日の日程連絡

⑸　研修日程及び内容

Table1 に、附属大塚特別支援学校で実施された研修プログラムの一覧を示した。

⑹　実 施 方 法

附属特別支援学校では、附属学校の使命の一つである「大学の教育・研究と連携を図る使命」として教育実習生・介護体験学生等を受け入れている。そこで、本プロジェクトを附属大塚特別支援学校で実施する際、教育実習の手法を基盤にしたプログラムを導入することにした。これは、前年に実施した南米三カ国特別支援教育研修で導入されたプログラム（１週間）とほぼ同様のものである（野村、2011）。通常の教育実習では２～３週間のプログラムとなっているため、この教育実習プログラムをアレンジしたプログラムを新たに作成した。なお、附属大塚特別支援学校での教育実習では、以下の内容を実施している。

【実習の内容】

①　幼児・児童・生徒の様子の把握理解
②　各学習形態ごとの指導計画立案と指導実践
③　学級経営への参加と学級事務処理及び校務分掌の理解
④　生活指導の実際と指導実践
⑤　研究授業の計画と実施
⑥　学校・学部・学級行事への参加

本プロジェクト実施のためのプログラムでは、上述した①から④を講義で行い、「授業案及び教材教具の作成」として⑤を実習として行った。

【指導案作成・模擬授業の手続き】

附属大塚特別支援学校で実施される教育実習（研究授業）での手続きを参考にし、以下の手続きで行った。

①　全校の施設・授業参観・説明を受ける
②　モデル授業を見学・質疑応答
③　モデル授業指導案の分析
④　指導案書式を用い、計画立案（研修員５人合同）
⑤　指導案作成グループ（２名）と、教材作成グループ（３名）に別れ、作業する。指導案作成グループは、PC を用いて行い、教材作成グループでは、プログラム提示用のホワイトボードの整備・文字記入、手作り楽器の作成（チャフチャス*を貝殻と紐でつくる）、使用する音楽を選定する
⑥　教材・教具借用（CD デッキ、チャフチャス、マラカス、鈴、布、衝立等）
⑦　模擬研究授業リハーサル
⑧　模擬授業の反省・討議、指導案の修正
⑨　指導案印刷、指導案日本語翻訳（通訳）
⑩　模擬授業実施
⑪　反省会
⑫　反省を基に、改善指導案作成

注）＊　チャフチャスは、別名チュルチュル。リャマや羊の爪を乾燥させて組んだ楽器。木の実を利用したものもある。

２．模範授業見学

附属大塚特別支援学校小学部教員による小学部（合同）音楽の学習指導案（模範授業）は資料１に示した通りである。

ボリビア国研修生は、見学することが中心的な課題であり、児童との関わりを持つ場面も設定された。

資料１

模範授業　指導案

平成 24 年度　小学部『音楽』学習指導案（略案）

日　時：2012 年 6 月 13 日㈬　11：10 ～ 11：50
場　所：小学部プレイルーム
児　童：１年生４名　２年生４名　３年生４名
　　４年生４名　５年生４名　６年生３名
　　計 23 名
指導者：A（MT）・B（ST1）・C（ST2）・D（ST3）
　　・E（ST4）・F（ST5）・G（ST6）・H（ST7）
　　・I（ST8）・J（ST9）

１．単元名　『歌おう！踊ろう！世界のリズム』

２．単元設定の理由

本学部の児童は、発達水準が田中ビネー式知能検査で測定不能から IQ70 代と幅広く、障害種も自閉症や広汎性発達障害、ダウン症、知的発達障害等と幅広い特性のある集団である。また、学部全体の授業であるため、6 才から 12 才までの児童が対象であり、それぞれの発達水準や障害特性及び生活年齢に配慮した内容や目標の設定が必要不可欠である。それぞれの水準に応じて、自分の役割を果たすことや、特に上級生はリーダーの役割を果たすこと、友達と一緒に協働活動すること、達成感を得て誉められ自信を持つこと等が課題となる。児童達は、日々の活動や宿泊行事を通して、学級を超えた友達との仲間意識も育ってきているので、友達と一緒に協働活動を行うこと、そしてそれが楽しいと体験することが必要な集団である。「フォーマットの中で行動と情動の共有が課題となる児童」「物を介した遊びやイメージ及びルールを介した遊びの中で目標と知覚の共有が課題となる児童」「ゲームやルーティンの中で意図と注意の共有が課題となる児童」が在席するため、これらの課題を個に応じて設定しながら、学部全員で一緒に取り組める音楽活動として、『歌おう！踊ろう！世界のリズム』を設定した。世界中のいろいろなリズムを取り入れながら、楽しい活動の中で知識や経験の幅が拡がるように考慮した。

本授業は、教科としての音楽（情操領域より）と他の領域（関係の形成と集団参加）を合わせた授業であり、学習内容表の「情操」領域Ⅱ．音楽的な内容より、「音楽が流れると楽器を自由にならし表現する」や「相手の音に合わせて楽器をならし表現する」を課題とした。「関係の形成と集団参加」の領域のⅥ.「目的・目標を共有して取り組む」より、１「役割」の「簡単な役割が分かり、お手伝いや係活動をする」、２「仲間関係」より「他者と同じ活動を行う」「集団活動の楽しさを知る」を課題として設定した。個別教育計画上の課題と学習内容表の課題より、音楽（曲）を手がかりとして友達の演奏の様子を感じ取り、自分の役割（パート）に気づき、一緒に演奏することを大きな目標とした。

音楽活動には、「曲に合わせて自分なりの演奏をし、誉められること」「友達と一緒にならして音が合う瞬間を感じ取ること」「曲を手がかりとして、タイミングを図りながら一緒にならすこと」等を盛り込んで設定した。また、目標とする活動（行動）を分かりやすく児童に伝え誘発しやすいように、行動や課題そのものを歌にした「オリジナル曲」を教材として創作した。「♪音楽はじまるよ」の曲は日本音階を基に創作し、お箏の響きに耳を澄ませながら歌い、活動の始まりを意識できるように考案した。「♪みんなであくしゅ」では、挨拶ゲームとしていろいろな友達と握手やダンスをする中で一緒に活動することの楽しさを感じること、「♪手をつないで歩こう」では、音楽に合わせて歩く、止まる、走る、ジャンプ、まわるなどの行動を友達と手をつないで一緒に体感することを目的とした。「♪鈴をまわそう」は、『キャラクター鈴』をみんなで持ち、クルクルと一定方向にま

わしていくことで、注視や追視行動を引き出し、リズムや期待感を共有することを意図した活動である。「♪SUN サンサンバ」では、サンバの曲調やリズムを感じ同期すること、サンバのリズムにのってマラカスを鳴らしたり踊ったりすることで発散できるように、「♪ともだちアロハ」ではハワイアンの雰囲気を感じてゆったり踊れるように、「♪スペインのおどり」では情熱的なフラメンコのイメージで動き、タイミング良く「オーレイ」のかけ声ができるように構成した。『くねくねマラカス』や『スポンジ鈴』を持ち、「♪マラカスならそう」では発散系の上下動、「♪みんなでゆれよ～」では沈静系の左右動、「♪右左ブギ」ではブギのリズムに合わせて右左パンチを行うことを目的とした。「♪すてきな音の歌」では、身近な先生達が演奏するいろいろな楽器に触れ、設定した。「♪さよならのうた」では、ゆったりとした曲で沈静することを目的とした。各活動の中で、楽しみながら友達との協働活動に繋がり、そして音階そのものの音感覚の獲得や、音階演奏やリズム打ちなどの基本的な「楽器操作スキル」の獲得にも繋がってくれれば良いと考える。

3．本単元の目標

① 曲調に合わせて表現する。

② 周りの音をよく聴き、合わせて演奏する。

③ 友達の演奏の様子をよく見て一緒に活動する。

（関連する関・集領域の学習内容）

「簡単な役割が分かり、お手伝いや係活動をする」　Ⅵ－１－①

「他者と同じ活動を行う」「集団活動の楽しさを知る」　Ⅵ－２－①

（関係する情操領域の学習内容）

「音楽が流れると楽器を自由にならし表現する」　Ⅱ－３－②

「相手の音に合わせて楽器をならし表現する」　Ⅱ－３－③

4．本時の目標

① 曲に合わせてタイミング良く楽器を鳴らす。

② 周りの音が分かり、自分なりの方法で表現する。

③ 友達の音を聴いて合わせて鳴らす。

5．展　　開

時　間	学　習　活　動	指導上の留意事項
導入５分	１．はじまりの歌『♪音楽はじまるよ』 ２．本時の内容を知る ・ホワイトボードを注目し、プログラムを知る。	・歌を通して授業の開始が意識できるように、「手はお膝、背中をピッ」で姿勢を正し、お辞儀をさせる。 ・耳を澄ませて音をよく聴けるように、ST は静かにして音を聴き、耳を澄ますことのお手本を見せる。 ・本時の内容を板書して読ませ、プログラムが分かるように説明する。
展開 30 分	３．歌おう！動こう！ 『♪みんなであくしゅ』 『♪手をつないで歩こう』 ・ピアノ伴奏のイントロを聴き、わかった児童から前に出て活動する。 ・曲にあわせて、歩いたり、ペアの友達を見つけたり、握手をして踊ったりする。 ・５回ほど繰り返し、席に着く合図の音で、席に着く。 ・歌に合わせて友達と手をつなぎ、歩く、止まる、走る、回る、ジャンプなどの動きをする。	・MT がピアノを弾き、イントロを呈示する。 ・児童が曲を聴いて活動できるように、ST6 と ST8 を中心に、ST も一緒に活動して見本を示し促す。 ・ペアの児童を見つけられない児童には、ST が仲介する。 ・ペアチェンジがスムーズに進むように、ST が仲介する。 ・動きのお手本として、ST が一緒に動く。 ・活動後に賞賛されることで、達成感と自信を持てるように、音と拍手で誉める。

	4．イントロクイズ　ドン！ 『♪おおシャンゼリゼ』　示範：ST1 『♪スペインのおどり』　示範：ST6、ST7 『♪ともだちアロハ』　示範：ST2 『♪ＳＵＮサンサンバ』　示範：ST6 ・ピアノ伴奏のイントロを聴き、わかった児童から前に出て活動する。 ・曲にあわせて必要にグッズを身につけ、歌い踊る。	・MT は、ピアノ伴奏で楽しい雰囲気を創り上げる。 ・友達の動きや踊り、演奏が意識しやすいように、MT はピアノ伴奏や歌を明確に提示し、やりとりや表現の手がかりとなるように進める。 ・ST は、フラメンコやハワイアン、サンバの基本リズムを演奏し、楽しさを支援する。 ・サンバで打楽器をやりたい児童は、ST と一緒に経験する。
	5．鈴をまわそう（『キャラクター鈴』ゲーム） ・『キャラクター鈴』を持って円になって座る。指名された児童は、会いたいキャラクターを選択する。 「♪鈴をまわそう」の曲に合わせて鈴を鳴らし、まわしていく。指定されたキャラクターに会えた児童は、拍手で賞賛され、次に会いたいキャラクターを選択する。	・『キャラクター鈴』を手がかりとして、椅子を持って前に出、円になって座るように指示し、支援する。 ・「何に会いたいですか？」と問いかけ、会いたいキャラクターを選択させる。 ・ピアノでリードし、曲が始まったら鈴を鳴らし、歌詞に合わせて鈴をまわす活動を促す。 ・会いたいキャラクターを自分の前で止めないように、ルールの確認などを行う。
	6．『くねくねマラカス』＆『スポンジ鈴』ゲーム ・友達と二人で『くねくねマラカス』や『スポンジ鈴』を持ち、歌に合わせて動く。	・ST は、素早く『くねくねマラカス』と『スポンジ鈴』を並べる。 ・ピアノに合わせて『くねくねマラカス』や『スポンジ鈴』を持ち、二人組になる。 ・音楽に合わせて歌いながら動く。 ・楽器が無い場合には、二人組で手をつないで行う。
	7．音をきこう『♪すてきな音の歌』 ・楽器紹介の歌に合わせて、楽器の音を聴き、いろいろな楽器の響きや名称、形状などに興味を持つ。	・歌に合わせて、ST1 は歌のお兄さん、ST3 はバイオリン、ST4 はユーフォニューム、ST7 はエレキギターを担当し、披露する。 ・歌が終わったら、再度楽器の名前を確認し、楽器の音に触れる。
ま と め	8．『♪さよならの歌』を歌う。 9．おわりの挨拶 ・日直はおわりの挨拶をする	・授業の終了が意識できるように、「♪おわりの歌」を５分歌ってクーリングダウンさせる。 ・「おしまい」がより意識できるように、「手はお膝、背中をピッ」で姿勢を正し、挨拶をさせる。

6．評　　価

① 曲に合わせてタイミング良く楽器を鳴らしたか。

② 自分なりの方法で表現したか。

③ 友達の音を聴いて合わせて鳴らしたか。

④ 個の目標が達成できたか。

7．教　　材

キャラクター鈴、手作りマラカス、くねくねマラカス、スポンジ鈴、コンガ、アゴゴベル、アゴゴドラム、マラカス、スカーフ、レイ、お箏、バイオリン、エレキギター、ユーフォニューム　他

※使用曲（オリジナル教材）：♪音楽はじまるよ、♪みんなであくしゅ、♪手をつないで歩こう、♪鈴をまわそう、♪ＳＵＮサンサンバ、♪ともだちアロハ、♪スペインの踊り、♪マラカスならそう、♪みんなでゆれよ～、♪右左ブギ、♪すてきな音の歌、♪さよならの歌（詞・曲　ねぎしゆか）

３．模擬研究授業

⑴　学習指導案作成にあたって

日本では、研究授業を行うにあたって、学習指導案が必ず作成される。教育実習においても、かなり多くの準備に要するのは、学習指導案作成といっても過言ではない。

一般的には、授業の計画には、教材研究と指導の立案が大きな柱となっている。

Table2は、これらの構造を示したものである（高谷、2004）。

Table2　授業づくりにかかわる内容

<table>
<tr><td rowspan="15">授業の計画</td><td rowspan="2">教材研究</td><td>実態の把握</td><td colspan="3">○幼児・児童・生徒の能力，発達の程度
○幼児・児童・生徒の興味・関心の傾向
個別の指導課題との関連</td></tr>
<tr><td>教材の把握</td><td colspan="3">○教育課題の分析
○教材・教具の選択，準備，作成
○内容の選択，配分</td></tr>
<tr><td rowspan="13">指導の立案</td><td rowspan="13">指導案の作成</td><td colspan="3">○単元・題材の設定
○設定の理由
○目標の設定（本時にかかわる個別の指導課題からの目標も含む）
○指導計画</td></tr>
<tr><td rowspan="11">展開計画</td><td>場の設定</td><td colspan="2">教室
座席
教材・教具の配置</td></tr>
<tr><td rowspan="6">活動の設定</td><td colspan="2">活動の選択</td></tr>
<tr><td rowspan="3">活動の構成</td><td>導入（動機づけ）</td></tr>
<tr><td>展開（中心的活動・個の活動）</td></tr>
<tr><td>終末（まとめの活動）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動の手立て</td><td>主体的な活動への手立て</td></tr>
<tr><td>教材の使い方</td></tr>
<tr><td rowspan="2">働きかけ</td><td colspan="2">教師の活動
（声かけ，発問，提示，板書，示範，賞賛）</td></tr>
<tr><td colspan="2">個別配慮</td></tr>
<tr><td colspan="3">評価の項目・方法</td></tr>
<tr><td rowspan="2">授業の実際</td><td rowspan="2">評価</td><td>評価</td><td colspan="3">○目的達成の様子
○取り組みの様子</td></tr>
<tr><td>反省</td><td colspan="3">○予想と実際
○指導技術の反省
○実態把握の程度</td></tr>
</table>

（高谷、2004）の表を一部改変

附属大塚特別支援学校の教育実習においては、最後に行う研究授業の前に２回程度の練習授業を行っている。しかし、本研修では、２週間という限られた期間であること、言語や文化が異なっていること等を考慮して、学習指導案に記載する項目は、一定程度省略（学校側からの情報提供により）し、学習指導案（略案）を作成してもらうことにした。

附属大塚特別支援学校の学習指導案（略案）には、以下の項目が必要とされる。

①授業名、②日時、③場所、④幼児児童生徒数、⑤指導者名、⑥単元名、⑦単元設定の理由、⑧本単元の目標、⑨本児の目標、⑩展開、⑪評価、⑫教材、⑬配置図。なお、個別の指導計画（個別指導計画）から単元での個の目標や本時での目標を加える場合もある。以下に述べる項目については、資料２「模擬授業学習指導案」参照のこと。

資料２

研修生模擬授業学習指導案

ボリビア国研修生　授業計画（音楽）

日　時　2012年６月20日（水）　11：10～11：50
場　所　小学部プレールーム
児　童：１年生４名　２年生４名　３年生４名
　　４年生４名　５年生４名　６年生３名
　　計23名
教　師：LG(MT1)，A(MT2)，LP(ST1)，RB(ST2)，
　　LO(ST3)，VM(ST4)，B(ST5)，C(ST6)，
　　D(ST7)，E(ST8)，F(ST9)，G(ST10)，
　　H(ST11)，I(ST12)，J(ST13).

１．単元名：　「世界のリズムを歌おう、踊ろう」

２．テーマ：ボリビア音楽のリズム

３．単元設定の理由

小学部の先生とMTのA先生によって行われた音楽の模擬授業により、大塚特別支援学校ではさまざまな発達段階にいる生徒が観察された。

先日の授業内容を継続する目的で、「世界のリズムを歌おう、踊ろう」の単元を策定した。この授業では次のような点が考慮されている。

－　チュチュワの踊りを使用して動きに刺激を与え、指示に従って、児童が様々な姿勢を取ること。
－　リズムがゆっくりのマチェテーロの音楽を聞き、グループと関わること。
－　ディアブラーダの音楽とスカーフを用いて、上肢、下肢の動きを変える。
－　今まで知らなかったボリビアの楽器の音を聞き、聴覚的感覚を向上させる。
－　２人１組になり、アイ・コンタクトなどを通して仲間と関わる。

４．本単元の目標

－　メロディに合わせて動きを表現する。
－　音をよく聞き、音楽のリズムについていく。
－　仲間の動きをよく観察し、一緒に行動する。

５．本時の目標

－　音楽を良く聞き、個人、二人一組、グループで、協調して体を動かす。
－　ボリビアの３つの楽器（サンポーニャ、コアンチャ、チュルチュル）を知る。

６．展　　開

時　間	学　習　活　動	指導上の留意事項
導入５分	１．あいさつ 　クラスを始めるために、全員が背筋を伸ばして座り、手を膝の上に置く。 　頭を下げて挨拶する。 　ピアノの音で、全員、活動を変えるために席に着く。	・先生がピアノを弾き、児童が起立して、礼をするよう、指示する。 ・MT ２がピアノを弾き、全員を着席させる。

単元の展開 30分	2．お知らせ 日直が授業の内容を知らせる。 生徒は情報のボードを通して、授業中に行われる活動について知らされる。 3．活　　動 みんなで歌い、動く。 先生、ST の動くのをまねて、チュチュワの音楽に合わせて動く。 ピアノの音で、全員、次の活動のために着席する。 4．最初のリズム （ボリビア・ベニ県のマチェテーロ） ・全員、手を取り、音楽のリズムに合わせて体を揺り動かす。 ピアノの音に合わせて、次の活動のために着席する。 5．二番目のリズム（ボリビア・オルーロのディアブラーダ） ・児童は部屋の中央に置かれた箱からスカーフを取る。 ・ST が協力して、動いていない児童に対し、見本を見せながら、教師の模倣をするよう、促す。 ・MT は、ST が部屋中央に置いた箱から、児童がスカーフを取るよう、指示する。 ・全員が音楽のリズムに合わせ、手端を交互に動かす（早いリズム）。 ・ピアノの音に合わせ、活動を変えるために着席する。 ・児童は歌を聞き、着席したまま黙って待つ。 ・児童は二回「なんだろう、なんだろう、当ててみよう」と歌う。 ・児童は楽器の音を聞き、ボードの後ろから出てきた楽器を観察する。 ・ピアノの音に合わせ、活動を変えるために着席する。 6．３番目のリズム ・お別れの踊り。音楽のリズムに合わせて動きを表現する。 ・ピアノの音に合わせ、活動を変えるために着席する。	・日直の児童に、授業内容を知らせてくれるよう、頼む。 ・MT は表情豊かに歌の動きを実施し、児童が動きをまねできるようにする。 ・MT ２がピアノを弾き、生徒を着席させる。 ・MT は、全員手を取って、音楽のリズムに合わせて体を揺り動かし、グループの構成員が身体的コンタクトを取りながら、大きな円を作って、広がったり、小さくなったりするよう、指示する。 ・ST はそれぞれの場所に位置し、児童が活動できるよう、協力する。 ・MT はピアノを弾き、全員を着席させる。 ・ST は各児童がスカーフを取り、動きをまねするよう、協力する。 ・MT は最初に音楽無しで動きを見せ、その後、児童全員に、自分の模倣をしてリズムに合わせて動くよう、指示する。 ・MT ２はピアノを弾き、全員着席させる。 ・MT は「フクロウの歌」を歌い、静かにするよう、指示する。 ・ST ２、３、４はボードの後ろに隠れ、MT の指示によって楽器を鳴らし、その後、姿を現して楽器を見せる。 ・最初はチュルチュル、次はサンポーニャ、コアンチャの順番で、「なんだろう、なんだろう、当ててみよう」と歌いながら質問し、ボリビアの楽器を知ってもらう。 ・MT ２はピアノを弾き、全員着席させる。 ・MT は音楽無しにティンクの動きを見せ、その後、全員、音楽と一緒に動きを模倣する。・MT はピアノを弾き、着席させる。 ・MT が、「ボリビアの音楽を聞いたり、踊ったりするのは楽しかったですか？」「楽器を聞くのは楽しかったですか？」「また、ボリビアの音楽を聞いたり、踊ったりしたいですか？」と聞く。 ・MT はピアノを弾き、授業の終わりを示す。
まとめ５分	7．評　　価 ・児童は自分の基準と可能性に従い、返答する。 8．終わりの歌（いつも音楽の時間に歌っているもの） ・お別れと授業の終わり ・全員、背筋を伸ばし、膝の上に手を置く。	

9．生徒の評価

－　それぞれの可能性に応じて一歩一歩活動についていけたか？

－　ゆっくりした動きを行うことによって、グループと関わることができたか？

－　仲間や先生の動きを模倣できたか？

10．教　　材

音楽：チュチュワ、マチェテーロ、ディアブラーダ、ラ・レチューサ「ふくろうの歌」、「なんだろうなんだろう」、「ティンク」、Radio CD デッキ、スカーフ、箱、ホワイトボード、楽器：サンポーニャ、コアンチャ、チュルチュル

⑵　**授　業　名**

模擬研究授業での授業内容は、ボリビア国 JICA 専門員によるニーズ調査の結果や、附属大塚特別支援学校の事情も考慮して来日前にテレビ会議を行った後で決定した。授業内容は、2011 年度に行った南米３カ国特別支援教育研修（本邦研修）と同様に、音楽の授業を小学生を対象にして行うことにした（野村、2011）。ボリビア国では、主な公用語がスペイン語のため、附属大塚特別支援学校で行う授業時には言葉の壁があり、話し言葉を理解しなくても授業が可能な内容が必須となる。南米３カ国の研修の際も、話し言葉の理解が必ずしも必要ではない授業として、音楽、体育が挙げられていた。しかしボリビア国では、音楽は初等教育の教員が行うのではなく、音楽専科（音楽専門校卒業）の教員が授業を担当しており、体育も同様に体育専科の教員（体育専門校卒業）が担当している。なお、ボリビア国では特殊教育・特別支援教育教員の免許はなく、初等教育の教員免許があれば特別支援学校の教員になることができる。

⑶　**児　　童**

模範授業と同様に小学部の児童全員を対象とした。小学部を対象にした理由は、ボリビア国の基礎教育は小学校からであるため、帰国後有効な学年として。

⑷　**指　導　者**

模範授業に参加した小学部教員全員に、ボリビア国研修員５名が加わった。メイン・ティーチャー１はボリビア国研修生、メイン・ティーチャー２はピアノ担当の附属大塚特別支援学校教員、残りはサブ・ティーチャーとして加わっている。

⑸　**単　元　名**

模範授業がモデルとなっているため、「歌おう！踊ろう！世界のリズム」から、「世界のリズムを歌おう、踊ろう」とした。

⑹　**単元設定の理由**

模範授業及びモデル学習指導案を参考にして、ボリビア国の楽器や曲を織り込んで作成された。

⑺　**本単元の目標**

モデル学習指導案を参考に、３つの目標を設定した。

⑻　**本時の目標**

モデル学習指導案から、さらに絞り込んで２つの目標を設定。

⑼　**展　　開**

研修員５人は、二人を除きそれぞれ異なった機関に所属する、教員養成校教員、特別支援教育センター校長、特別支援教育センター教諭という構成で、共通する考え方もあるが、統一させるのには時間が必要であった（後述の研修生の評価参照）。

導入５分、展開 30 分、まとめ５分の時間配分。展開では、ボリビア国の踊りや音楽を使用し、目標達成のための手立てが５人の研修生の討議によって検討された。なお、ボリビア国研修生は国内の３カ所（ラパス、コチャバンバ、サンタクルース）からの参加のため、地域で用いられている踊りや曲・リズム（ベニ県マチェテーロ、オルロ県ディアブラーダ、ラ・レチュサ：ふくろうの歌等）を織り込み、動作が異なる３種類の踊りとなっている。

⑽　**生徒の評価**

模擬授業を参考にしながら、本単元の目標及び本時の目標から、３つの観点で生徒の評価を行うことにした。

⑾　**教　　材**

教材・教具は、特に楽器は模擬授業を参考にしながら、同じ教材・教具を用いたり、新たに導入したり、作成したりした。楽器（チュルチュル、サンポーニャ、コアンチャ）も、異なった音が出せるものを準備した。また、視覚教材としてのホワイトボード（スケジュール）や、興味関心を惹く工夫として、音源を見せないボード

や一緒に「何だろう？」の歌が準備された。

⑿　学習指導案の修正

「導入」部で、指導者（MT）の立ち位置、教材・教具の提示の仕方等、討議をし変更した。また、「展開」では、３つ各々の踊りと次の活動つなぎ方や、教材・教具の提示の仕方・回収方法等を検討し、学習指導案に追加した。また、「評価」について、児童へフィードバックする方法について論議し、生徒に返す言葉や動作を精選した。

３．模擬研究授業反省会

当日参加者は、学校から副校長・大学院生・附属大塚特別支援学校教員、関係者としてJICA職員、また学校参観者（文科省）があった。

反省会の持ち方については、附属大塚特別支援学校の研究授業で用いられているルールを参考にした。

①　授業の良かったところを最低１つ言う。
②　もし改善するとしたら、どうするか述べる。
③　必ず発言する。

模擬授業の評価は、授業の反省会において、以下の手順で行われた。

【反省会の手順】

①　研修生：指導者（Main Teacher）からの反省等
②　指導者（Sub Teacher）からの反省等
③　大塚の担当者から助言
④　副校長からの助言

Ⅱ　附属大塚特別支援学校での研修生の評価

附属大塚特別支援学校の授業反省会での発言、JICA東京（東京国際センター）でのまとめの会での発言、本センターのアンケートからの評価について以下に整理した。

１．講義から

・授業での動と静の構成の話は、授業づくりに役だった。
・子どものニーズの把握と集団のニーズ把握から個別の指導計画を作る重要性を知った。
・ボリビアに帰り、検討すべき事がある。東京都の学習内容の表（東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課　2011）をスペイン語に翻訳してもらった。これを参考にボリビア版を作成したい。
・子どもの自主性を育む指導の重要性である。
・教材・教具の効果的な使い方。同じ教材を使用しても、目標によっては別のやり方ができる。とても創造的である。
・支援部で作成した「およその発達段階（安部、2009）」は帰国して活用したい。
・学校での長期の学習計画においては、社会に出てよりよい生活ができることを知ることは、家庭にも伝えることができて良いと思った。日々真面目に取り組むことで結果が得られることが分かった。

２．授業・施設見学から

〈学校経営〉

・研究授業、反省会、ポスターセッションといった一連の活動について。自分の授業の自己評価や学校の自己評価ができる。また、授業を発展させるための創造性があること。日常のルーチン活動に陥らないように創造的に取り組む必要があることが分かった。
・全般的に強い印象を受けた。それは、学校がどのように組織的に関わって動いているかという点。
・大塚では学級や部の決まりがあると分かったが、学校全体の共通の決まりに従って運営されていることを理解した。
・実験学校であるということ。他の学校に統合しながら通う児童。教員はすべての教科を教えていること。

〈教　　師〉

・授業だけでなく、教師が普段の学びをどうしたいのか、子どもはどうしているのか、それらがつながっており、子どもは確かに身についている。
・日本の教師は精神的に成熟している。発展的に取り組んでいる。

〈授　　業〉

・理論的・実践的な情報。教材・ツールの利用、作業場全体の組織および作業の実施。
・成人としての生活にいっそう適応できるよう、自立と社会関係を重視していること。使用されている教材、学級構成、学校の始業時間と終業時間。
・活動をすすめる上での授業構成：家でやってきた宿題の発表、個別の課題、朝のホームルーム、授業の展開と結び。
・サーキット運動や音楽の授業のこと。１つの活動に、他の学年も合同で行っている。方法論は良く、ボリビアでも活用できると思う。
・大塚では、小さいときから簡単なことから始め、だんだんと難しいことに挑戦させ、社会性を育んでいる。単純だが日々くり返して、社会性やコミュニケーションが育まれている。

・子どもが自己評価とともに他者評価を行っていたことだ。やり方は様々あったが、評価することを目的に置き、実行している点は良かった。
・要素を考え、授業を考えること。
・幼～高の子どもたちは、日々向上していき、今日できなくても明日はうまくできるように、教育することで明日が広がると思う。
・文化的な違いがあると思うが、大塚では、登校後、下校前に毎日服の着替えがある。日々積み重ねることで衣服の着脱が確実になっている。ボリビアでは着替えはしていないが、これはボリビアでも可能だと思った。
・理論を聞き、実践をしている様子も見ることができた。
・職業訓練のための作業場は、やる気を出させる体験であること。ギャラリーや展示会における成果の展示。課題に取り組む生徒の責任感。
・視覚・話し言葉・聴覚資源の活用および朝礼での体操の時間。生徒もまたこの朝礼の主人公であり責任者であること。

〈施設・設備〉

・学校内の（物理的）構造化。
・学校のインフラ、建物、屋上・塀のフェンス。

〈そ　の　他〉

・守衛さんは毎日笑顔で迎えてくれたが、これはとても大事なことだと思った。また副校長先生もニコニコして迎えてくれた。ボリビアでも行いたい。学校に入った瞬間から、楽しい気持ちになる。
・ボリビアと大塚のみなさんと文化交流（合同朝会でのダンス）ができてとても幸福な気分になった。
・大塚の子どもたちと接することで、ボリビアの教え子たちと同じ気持ちでいることができた。
・給食もお陰様で、毎日美味しく食べることができた。
・これは研修とは開孫ないことだが、日本のすばらしいことは、教師が健康診断を受けることができること。先生が元気なら、ＯＫ！健康に配慮することはよいこと。

３．模範研究授業（公開授業研究）から

・研究授業の流れが参考になった。
　観察→分析→協議→改善。
・授業の振り返りは、良い点に着目し、建設的に述べるのが良かった。
・研究授業に一連の流れについて。
　計画→実施→振り返り。
・興味関心を持ったことは、小学校３、４年生、中学校１年生の公開研究授業。

４．模擬研究授業から

・研究授業をチームで行い、大塚の子どもたちとも経験を共有できた。
・前の週に、理論を学んだので、応用することが重要な過程となった。また、アセスメント、分析、個のニーズから作ることが大事だった。
・工夫した点は、ボリビアから持ってきた楽器に似せて、貝殻で楽器を作ったことだった。

５．施設見学から

・（一般社団法人障害児・者の自立を図る桐親会）工房わかぎり、（社会福祉法人山鳥の会）ワークショップ山鳥を知り、重要だと感じた。
・文京区立柳町小学校では、障害児と健常児との間に境がないことを知ることができた。気持ちの良い学校生活は、異質なものを除外するのではなく、全員が学校の一員であるということを感じた。
・ワークショップ山鳥のチーフＹ先生がおっしゃった「夢を捨てないで」は私もそうでありたいと感じた。

６．全体を通して

・今回、時間を費やしたが、生徒への知識、把握が重要だ。第１に授業そのものの展開が重要。どのような戦略を使って授業を作るかを学んだ。戦略は、指標を使って子どもの能力を測れるものでなくてはならない。次に展開に必要な、論理的な順番をたてること。論理的構成から教材をどうするかが分かる。３番目、作る過程で、よくよくみんなで考え、見直し、吟味が必要なこと。途中で何回も運行して作っていく過程が大切。まとめの部分にその改善点を入れていくことが大切。メンバーは種々の場所からきており、シェアできるのが重要。大変勉強になった。
・知的障害グループは発達段階表（安部、2009）を使って、子どもの状況をチェックすることを学んだ。グラフにすると一目瞭然。同じ紙に書くとグループ分けするのに役立った。この表を使うと、個のニーズが分かる。支援すべき領域、等が分かる。グループのニーズを、個と集団のニーズから見当をつけた。このツール利用は重要だった。プロセスでは、いろいろなところから来た同僚の意見を聞くことができて参考になった。
・計画で難しかった点、生徒の予想、うまくいかなかっ

たとき、どうするかを考えるのが難しかった。内容を盛り込む、必要な時には状況に応じて変えることを学んだ。発達表などから作ったが、授業は何が起こるか分からないので、それも書いた。

・およその発達段階表はすばらしいツールだ。ある程度書いたあとで、ニーズに合っているか振り返ったりするのに役だった。Mさんから出ていた「自己評価表」は、非常に役に立った。不足点などのチェック。この２つのツールは、いずれもチェックするのに非常に役立った。私たちのグループでは出身が別々の方だったので、背景もまちまち。コンセンサスをとるのが難しかったが、経験を交換できた点は良かった。

・他の人の意見を尊重することを学ぶことができた。我慢強く寛容になれるということが大切。

・かなり学習指導計画は詳細を決めなければいけないことがたくさんあった。いす・机の必要、立っているのか座っているのか等。

・難しい面もあったが、一人では感じられなかったことを豊富に経験できた。これの積み重ねで、良い先生になれるのではないか。

・この練習は大事、個のニーズと集団のニーズの関連づけ。加えて教師としてなにを教えたらよいか。どんな目標を立てたら良いか。今回だけではなく、これからもすべての活動に活かしていきたい。学習指導計画に詳細なことを書き、教材・教具も書くので即興でやることは避けられる。次回にも使えることを知った。

・プロジェクトの成果：国の特別支援教育のセンターが初めて仕事をして、別々の各センターが共通しておこなおうとしたきっかけになった。

・研修生の各人が各場所で、周りを変える人材になることを目指しているので、感化していきたい。

・子どもたちが自立すること、そして見通しを持って関わることが大切。その後の人生で自立することを頭に置いて働いておきたい。インクルージョン（生活・働き）を考えて。

・音楽が指定された。N先生はいろんな楽器を弾く専門家。我々は誰も楽器を弾けなかったことで、プレッシャーを感じたことくらい。

・音楽は、チャレンジだった。ボリビアの楽器を紹介してほしいということだったが、私たちは初心者であったので、いろいろ考えて実行したことは良い結果だったと思う。

・自分たちが言葉をしゃべれない、限界と反省会でいったが。N先生は、言葉に頼らない授業もある。小さな子は言葉に頼らなくても良いことを学んだ。反省会は、ポジティブな印象を受けた。良い刺激を受ける反省会でないといけないと聴き、実際にその様子を見て良い刺激を受けた。

・ボリビアの最近出された教育ビジョンは、理論的生産的な子を育てる。総合的に成熟された人間を目指すのだが、教員も様々な専門家、たとえば心理、音楽など、理学療法士でなければならない場合もある。

・教員養成、人間を育てる人間を養成することを考えていかなくてはならない。

Ⅲ　センターのコーディネーション機能等について

本センターが核となり、センター教諭がJICA（ボリビア事務所・本部）と大塚特別支援学校との連絡調整を有機的に行うことが、本プロジェクトを成功裏に進める大きな鍵となっていた。研修の場である特別支援学校の様々な資源を活用するためには、各特別支援学校を熟知していることが不可欠であり、研修生のニーズに極力添いながら、現場での制約の中で最大の効果を生むようにすることが求められる。

研修生から「筑波大学が今回の研修を引き受け、調整をしてくださらなかったら、この研修は実現できなかった」との感想が出されていた。

また受け入れ校だった附属大塚特別支援学校の担当者から、「今回の様に音楽やダンスを中心に授業を行うのであれば、特に通訳を介さなくてもノンバーバルな良さを活かして授業を進められると思います。研修生の方々は『ことばのかべ』を気にしていらっしゃいましたが、子ども達はほとんど気にせず雰囲気をつかんで楽しんでいました」と模擬授業の感想が出され、今後、改善すべき点について「今のかたちで良いと思う。この形を大切に事例として蓄積し、体系づけていけば良いと思う」、しかし実施時期については「学校の実態を踏まえて時期を検討していただけると助かります。（授業研究会等との重なり…）」と指摘があった。

これらのことから、研修生、受け入れ校共に成果はあったと言えよう。

加えて、全体を通じた効率の良い運営方法を、昨年度まで実施された南米３カ国特別支援教育研修と同様に、研修生がその日の課題を理解し、どう受け止めたかを丁寧拾い上げる工夫を実行した。それについては、研修生のアンケートに次のように記されている。

「大塚でよかったこと。子どもたちは朝の会があるが、研修員にも朝の会があって本日のポイントを知った。子どもたちは帰りの会もあり、反省、明日のことを知った。私たちのも終わりの会があって、子どもと同じに役立った。」

すなわち、毎朝、本日の見るべきポイントを伝え、帰る際に、反省を兼ねて感想や補足説明をするようにしたことである。感想にもあるように、研修企画側が伝えたいことを一定程度理解してもらえた様子が明らかとなった。

また、日本独自の方法や考え方が、研修生にどう理解され、本国に帰ってから改良されて活用してもらえるのか？日本にしかない材料等ではなく、多少工夫しながらも現地にある材料を用いて行えるかどうかについて討論した。

Ⅳ　まとめと今後の課題

研修生及び大塚特別支援学校教員の評価から、本研修がはどのような成果や課題が出されたのかは様々な意見が上述されているが、ここで若干の整理を行いまとめと今後の課題を展望したい。

１．研究授業の実施と学習指導案の作成

西尾ら（2011）は、授業研究を行うことでボリビア国の小学校教師の意識を変容させた実態を報告しており、教師間の同僚性の形成過程を検証する課題を呈している。特別支援教育においても、ラパスの特別支援教育センターで、授業研究が実践されており、広がりが出ている様子がうかがえる。

研修生からの返答にも、研究授業を行うことが前提となっており、公開する授業を行う際には、学習指導案があることでガイドとして、また授業を振り返るツールとして活用できることを実体験している。

しかし、何故その授業を行うのか等の基盤となる児童の実態把握は、そのツールがなかったことで、これまで教師の経験に依存した方法が採用されていたようである。今回の研修で、子どもの発達段階表（安部、2009）をツールとして用いた演習を行ったところ、その活用の有効性を感じた研修生がほとんどであった。今後活用して欲しいと願うところである。

２．授業づくり

ボリビア国では、「教師文化は権威主義的な個人主義であり、学校では教師による参加的で協同的な活動を取り入れた組織を作っていく必要がある（ANTONIO, 2004）」、とされる。今回のように国こそ同じではあるが地域や所属や職階が異なるメンバーで、授業づくりをすることは、研修生にとって初めてのことであった（筑波大学附属大塚特別支援学校ではすでに南米３カ国特別支援教育研修生が実施している）。違いがある５名が同じ目標に向かって協働的に作業することになったが、実施するのは異国の日本であり、サブの教員も言葉がほとんど通じない多数の日本人教員との協働作業である。感想にあるように、当初は困難な作業ではあったが、一定程度の水準の授業を行うことができた。この成果は、やがて同じ職場内から、さらには帰国研修員間のネットワークによる協働的教育活動の広がりの可能性が秘められていると言えよう。全国セミナー等の研修や、本邦研修で研修生が知り合ったことによるネットワークは、有効に働いて欲しいと願うと同時に、本プロジェクトの成功を祈りたい。

３．教師像の確立と新たな取り組み

JICA ボリビア国専門家が指摘しているが、ボリビア国の教員は、目指す教師像を持たない者が多いという。しかし、本邦研修を体験した後には、日本で出会った教員（小中学校や特別支援学校教員）の生き方、教育観等に大きな影響を受けて、人生観にさえ変容を与えると聞く。今回の数名の研修生から、教育観や人生観が変わったと答えている。帰国後の研修生たちの様子や教育の成果について、今後さらに知りたいところである。

また、帰国後活用したい日本での学びの普及では（全研修生 10 名中）以下のような期待が語られた。

自立性を高める職業訓練の作業場を取り入れること（３名）：知的障害をもつ生徒のための情報処理分野における対応を開始することや業務手法を参考にすること。児童生徒の自己評価と教師の評価表の活用（２名）：自立活動の導入（自立と社会関係に配慮した授業の実施）・個別指導計画の作成、視覚的資源を活用した授業づくり（２名）、授業案の作成（１名）、指導の手立て・方法の工夫（２名）。

これらの内容が、実際に展開されることを期待したい。

４．今後に向けて

ボリビア国からの新たな情報（JICA）によれば、パイロット校の教員養成大学（特別支援教育専攻）で 2011 年に初募集を行った後、法令の移行期間であったために特別支援教育専攻の学生募集が 2012 年一時停止されたが、2013 年も募集を行わないことが決まったと

のことである。

現状では先行きが不透明となっているボリビア国の特別支援教育が、帰国研修生のネットワークを基盤に、教育省－大学－教育現場（特別支援教育センター）の連携を密にし、少しでも充実、強化されることを願ってやまない。

謝辞

ボリビア国研修生に対する研修実施にあたって、附属大塚特別支援学校の諸先生方に多大なるご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

付記

本研究は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究 H23 ～ 24 年度）:「南米ボリビア国の障害児教育における教師教育モデルの構築と展開」（課題番号：23653314、研究代表：安藤隆男）の助成を受け、独立行政法人国際協力機構（JICA）との連携により実施した。

文献

安部博志（2009）およその発達段階（Ver.5）筑波大学附属大塚特別支援学校.

ANTONIO, P.(2004) Educar para Humanizar. Narcea, Bolivia.

国際協力機構人間開発部（2010）ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト実施協議報告書（付・詳細計画策定調査報告書）.（JICA 提供資料）

国際協力機構（2011）国際協力機構年次報告書 2011 年度.（JICA 提供資料）

西尾三津子・久保田賢一（2011）ボリビアにおける授業研究の実践と教師の意識変容、日本教育工学会論文誌　35、89 － 92.

野村勝彦（2011）南米３カ国特別支援教育研修（本邦研修）－筑波大学附属大塚特別支援学校での模擬授業について－、記録メモ.

国際協力機構（2012）ボリビア多民族国特別支援教育教員養成プロジェクト（FM-EID）運営指導調査団報告書.（JICA 提供資料）

左藤敦子・池田彩乃・安藤隆男・四日市章・藤原義博・長﨑勤・間々田和彦・日髙雄之・吉沢祥子・佐藤孝二・野村勝彦・沼澤聡子（2013）国際教育協力事業における教育実践を基盤とした研修プログラムの構築－ボリビア多民族国研修生を対象とした事例を通して－、障害科学研究、37、65 － 76.

高谷有美（2004）教育実習における「授業づくり」についての研究－教育実習生の指導で大切なものを考える－教育実践総合センター紀要、3、93 － 98.

東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課（2011）知的障害特別支援学校における各教科の具体的な内容の例.

筑波大学特別支援教育研究センター（2007）拠点システム構築事業「国際協力イニシアチブ」報告　青年海外協力隊派遣現職教員のサポート．筑波大学特別支援教育研究、2、99 － 103.

筑波大学特別支援教育研究センター（2008）「国際協力イニシアチブ」教育協力拠点形成事業資料集.

An Attempt at Hands-on Training to the Trainees from the Plurinational State of Bolivia

― A Case Study in Special Needs Education School for the Mentally Challenged, University of Tsukuba ―

Katsuhiko NOMURA [*,****] Takao ANDO [**] Akira YOKKAICHI [**] Yoshihiro FUJIWARA [**] Tsutomu NAGASAKI [**]
Atsuko SATO [**] Kazuhiko MAMADA [*,***] Takeyuki HIDAKA [*,****] Sachiko YOSHIZAWA [*,******] Toshiko NUMAZAWA [*,*******]

We conducted a training program for the teachers from the plurinational State of Bolivia for about one month (from 4th June to 29th June) at the Special Needs Education Research Center, and at the University of Tsukuba. Especially, In this program, a two-week hands-on training was done in cooperation with Special Needs Education School for the Mentally Challenged (Otsuka) University of Tsukuba between 11 June-22 June. There we had lectures and educational exercises, and a trial lesson with a training group of five Bolivians who are studying on intellectual disabilities. These trainees were able to find the possibility of making Japanese-style class that would apply to education in Bolivia. They were also able to know haw to watch a real condition of the child and effective teaching ways. Such a training that offers hands-on experience with international educational cooperation would be useful th the trainees who came from different workplaces and positions in Bolivia.

Key Words : The plurinational State of Bolivia, International educational cooperation, Trial lesson, Hands-on training, Special needs education

* Special Needs Education Research Center, University of Tsukuba
** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba
*** Special Needs Education School for the Visually Impaired, University of Tsukuba
**** Special Needs Education School for the Deaf, University of Tsukuba
***** Special Needs Education School for the Memtally Challenged at Otsuka, University of Tsukuba
****** Special Needs Education School for the Physically Challenged, University of Tsukuba
******* Special Needs Education School for Children with Autism, University of Tsukuba